

発行所（郵便番号100）

東京都千代田区丸の内2-4-1
丸ノ内ビルディング781号室
社団法人スウェーデン社会研究所
Tel (212) 4007・1447

編集 中 嶋 博
責任者

印刷所 関東図書株式会社
定価200円（年間購読料参千円）

1983年7月25日発行

第15巻 第7・8合併号
（毎月1回25日発行）

昭和44年12月23日第3種郵便物認可

スウェーデン社会研究月報

Bulletin Vol.15 No.7・8合併号

Japanska Institutet För Svensk Samhällsforskning
(The Japanese Institute for Social Studies on Sweden)
Marunouchi-Bldg., No. 781. Marunouchi, Chiyoda-ku, Tokyo, Japan

その後の社民党政権：潜水艦いまだ浮上せず

Olof Palme, Kjell-Olof Feldt and SAP-Government

評議員 早稲田大学教授 岡 沢 憲 美

Prof. Norio Okazawa

82年選挙で快勝して、6年ぶりに政権復帰した
パルメ首相は、2つの政策課題を解決するために
本命フェルト Kjell-Olof Feldt (51歳、ヴェス
テルボッテン出身、議員歴11年)を経済・予算相
に任命した。パルメーフェルト・ラインは野党時
代から政権構想の基軸と評価されていたが、安定
した権力基盤を獲得して予想通り浮上した。

第一の政策課題は経済再建であった。ブルジョ
ワ政党が政権を担当した6年間に経済は悪化した
——失業者の増大(16万6000人)、国際債務の膨
張(640億クローネ)、倒産の増加(2万6000件)、
資本投資の激減(35%減)、インフレの高速化
(食料費92%)。ブルジョワ政権のツケを支払う
ために政権発足時に発表した《危機突破プラン》
の一環として82年10月にクローネを16%引下げた。
一方で国内消費を刺戟して経済を活性化させなが
ら、企業の国際競争力をつけて輸出を伸ばし、経
済発展の突破口にしようとする戦略であった。だ
が、予算編成では野党時代に見せた積極的・攻撃
的な改革精神はトーン・ダウンした。来たるべき
年金危機(2000年には3.1人の労働者が1人の、
2030年には2.1人で1人の年金受給者を支えな
ければならない)から福祉政策の抜本的改革をも射
程に入れなければならない社民党としては簡単に
答えを出すわけにはいかないであろう。予算案
はブルジョワ政党の集中砲火を受けた——「悲惨
な予算」(穏健統一党アーデルソン)「悲劇の予
算」(国民党ウルステン)、「悲しい予算」(中

央党フェルディン) EXPRESSEN 1983. 1. 10。

第二の政策課題は労働者基金問題である。ポ
スト福祉国家のシナリオの基礎として70年代中期
から論争の中心にすえてきた社民党としてはこの問
題を避けて通ることはできない。だが、パルメも
フェルトも《労働者基金のコスチューム》の製作
に今も悩んでおり、水面下に潜ったままである。
本年5月6日にLOのエディン Per-Olof Edin
が《利潤分割モデル》、《利潤分割基金》の設立
という考え方を提出したが、法人税の増税・複雑
化に過ぎないという批判が同陣営からも出る仕末
である。神経過敏になっている穏健統一党は《特
別法人税》導入の可能性という潜望鏡を発見して
素早く対応し、「アンドロポフの潜水艦とエディ
ンの潜水艦ではどちらが危険か」というキャンペ
ーンに着手した。いずれにせよ、「王様の新しい
服 Kejsarens nya kläder」(EXPRESSEN,
1983. 5. 7)は今なお製作中であり、社民党の明
確な経済政策は水面下に潜ったままである。

目 次

その後の社民党政権：潜水艦いまだ 浮上せず……………岡沢 憲美… 1
セメステルという言葉について…菱木昭八朗… 2
スウェーデンの夏……………中村 明雄… 3
(新刊紹介) T・フセーン教授「自叙伝」…………… 5
(研究会報告) アルバ・ ミュールダールの軍縮論…………… 5
SIPニュース…………… 5

スウェーデン語のセメステル という言葉について

On the Swedish "Semester"

専修大学法学部 教授 菱 木 昭 八 朗

Prof. Shohachiro Hishiki

スウェーデン語で年次休暇のことをセメステル (Semester) という。たとえば年次休暇法のことをセメステル・ラーグ (semester lag) とかセメステル・レット (semester rätt) というように。

年次休暇のことをセメステルと呼んでいるのはヨーロッパはもちろん北欧諸国の中でもスウェーデンぐらいのものである。それでは一体、ヨーロッパ諸国で年次休暇はどのように呼ばれているかというと、因みにイギリスでは Holidays with pay (但しアメリカ英語で Vacation)、ドイツでは Urlaub、フランスでは congé payé、ノルウェー、デンマークでは ferie と呼ばれている。

元来セメステルという言葉はラテン語の sex と mensis の合成語である semster の形容詞 semestris から出てきたものであるが、何時の間にかスウェーデンでその言葉の本来の意味つまり半年とか六ヶ月のといった意味が失われ、年次休暇という意味に用えられるようになったといわれている。

それでは一体、何時頃からどのような経過を辿ってスウェーデンでセメステルという言葉が年次休暇という言葉の意味に用えられるようになったのであろうか。

元スウェーデン法務大臣で、ルンド大学の労働法の教授でもあったレンナルト・イエエル氏が年次休暇法のテキストの中で、セメステルという言葉がスウェーデンで年次休暇という言葉の意味に使われるようになった経緯について簡単な説明をおこなっている。外国語がその言葉を輸入した国において全く別の意味に使われるようになった実例としてもおもしろい事例であると思われるので、イエエル氏の解説を更に簡単に紹介してみたい。

イエエル氏の説明するところによれば、年次休暇という言葉でのセメステルという言葉がスウェーデンに入ってきたのは18世紀半頃で、スウェー

デンがフランスの軍制を輸入したときに、フランス軍制と共に入ってきたものであるという。

ところでイエエル氏によれば17世紀末頃のフランス軍法では、戦争の暇なとき、フランス軍将校は主として冬期であるが、3ヶ月から4ヶ月の特別休暇が与えられ国許に帰えることが許されていたという。そしてその特別休暇が congé de semester と呼ばれていたということである。

18世紀半ば、スウェーデンにおいてフランス軍制が取り入れられたとき、特別休暇制度もそのまま取り入れられ、軍人に与えられる休暇のことをセメステルと呼んでいたといわれている。つまり半期の休暇という言葉の後の部分だけが生き残ったわけである。従って、セメステルという用語は始め軍人の間で用いられていたいわば軍人用語であったものが、官庁から更に民間に広まっていったというわけである。イエエル氏の説明によれば、公式の文書で最初に年次休暇という意味でセメステルという言葉が出てくるのは1756年11月5日付の国王から各師団宛に送られた書簡だそうであるが私はその現物を見たことはない。

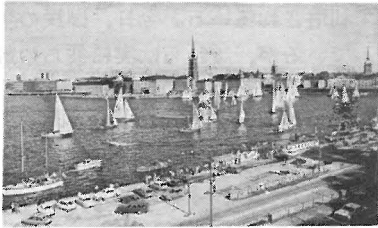
スウェーデンにおいて今日のような被用者の権利として年次休暇制度が確立されたのは1936年以降のことであるが、それまで年次休暇は役所や民間企業では一種の賜暇として被用者に対して慰労休暇が与えられていたということである。従って昔はおそらく2、3日の慰労休暇でもセメステルと呼ばれていただろうと思われるが、今日スウェーデンでセメステルと云えば、普通6・7・8月の間に被用者に支給される1ヶ月以上の年次休暇のことである。丁度、今頃はスウェーデンのセメステルの真盛り、みんなが太陽を求めて南から北へ、北から南へ民族の大移動が繰り返されていることであらう。

スウェーデンの夏

A Summer in Sweden

会員 中 村 明 雄

Mr. Akio Nakamura



太陽に憧れる国スウェーデン。国土の7分の1が北極圏に属するこの国は、冬は暗く沈み込み太陽のない数週間さえあるという。その冬が終わり太陽の季節が到来した。神の存在にも等しいといわれる陽光の中で、スウェーデン人はこの短い夏をどのように過ごすのであろうか。以下、スウェディッシュ・インスティテュートの「スウェーデン歳時記」(Round The Swedish Year)より要約したものを紹介したいと思う。

●夏至の太陽と夏至祭

6月に入ると奇妙な快活感が生じてくる。それは何か非常に深々としており、身体、精神ともに調子が上がっていくような、というよりはむしろ、自然に対する動物の本能的な反応に近いものといえよう。これは夏の太陽が出るこの時期のものだ。陸地はほんの少し前までは暗く沈みきっていたのが、今や光の中で輝き、しかもその輝きはヨーロッパ一番のものといえる。

人々の倦怠は終わり、睡眠さえ落ち着いてでなくなる。たとえ特別製の黒カーテンが、それまでの長い北欧の夜の光を閉ざしていたとしても、この時期の陽光をさえぎることは、このカーテンをもってしても無理なのである。はるか遠方に出た真夏の太陽は輝き満ち、長い冬の間続いた闇や、ものうさを、真に償うかのように明るさを放つのである。一年を通し、陽が最も長くて明るくなる20日頃まで、夜は日ごとに明るさを増してゆく。夏至祭—この世から決して消え去ることを知らない日である。中央公園、夏別荘、田舎の村—いかなるところでも行なわれる夏至祭に出かければ、人々は夏至を祝っている。というのも、これはスウェーデンの年中行事の中ではクリスマス・イブと並び、太陽に飢えている国民にとっては最も盛大なもののひとつであるからだ。

外の広場では長い柱に女性たちが葉のついた枝を巻きつけ、上部となるクロス・バーには花の飾り輪をつけ終わるまで、その柱は横にねかされておき、やがて午後になると村人—長袖シャツの男たち、明るい衣装、あるいは教区の伝統的な民族衣装をまとった婦人、少女たち—がみな集まり始める。バイオリン弾き、アコーディオン弾きの準備ができると、にぎやかなスウェーデンの曲を奏し始める。見物人のかけ声や、男たちの威勢のよい声とともに、巨大な柱は青空へ向かってまっすぐに立てられるのだ。少年少女たちも大人たちも何重にも輪を作り、手をつないでバイオリン弾きたちの奏する民謡やかわいらしい童謡にあわせて、飾りつけられた柱の周囲を踊りながら回るのだ。そして子供らが深い眠りに入っても、外での踊りは続くのである。

●夏の魅力

夏は貴重だ。何をもってしても代え得ることができない。たとえ仮りに、全国的な災害が起こったとしても、全国民が活気にあふれる季節である。夏の到来は、理想としては何もしないことを意味している。できるだけ人ごみから離れたところでこの季節を過ごす。とはいっても、閉ざされた長い冬の間、ずっと人々との交流が少なく、それは心のいらだちにもなっているし、中には発狂的にさえなっている人もいることは事実である。しかしながら、夏はこうして疎遠になっていた人間社会との交流を取り戻すというよりは、自然に帰ったり、人々の生活を原始に近い状態に戻すといった時なのである。そのため、夏至前後には、国内外を問わずに人々は出かけることが多くなるのだ。街から離れる人々の多くは、簡素な小屋付きの、小さな郊外菜園へ出かけるが、そこにはじゃがいも畑やえんどう畑があるのだ。一方さらに遠くへ出かける人々もいる。時にそれは島であることがあるが、スウェーデンの東西両岸には数えきれないほどの島々がある。島を借りる人もいれば、自

分の島を所有している人もいるが、大抵の人は海沿いの避暑地にあるこじんまりとした小屋を低額で借りるか、漁夫の家族や、島の農夫と一緒に過ごすことが多い。群島には、その島々特有の魅力がある。東海岸を除いても、本土のように木でおおわれた島から、花こう岩のごつごつとむき出た島まで30万以上の島々がある。ここかしこと、棧橋によって結ばれた小集団社会が成り立っている。冷たく塩気のある水に、ほんのひとときつかうために、時おり止まりながら、入り組んだ島々の間に船を進めることは、スウェーデン人にまぎれもない幸福感をもたらすのである。また、ここ西海岸を除いても、楽しい夏を過ごせると考えている人たちもいる。岩の海岸線に沿って集落をなしている小さな漁村からは、植物は生植してはいないが、コケがむしていたり、色どり鮮やかな岩といった具合に、興味ある海の風景が見られる所もあるからだ。さらに、潮の干満がない海は、真にその美しさを感じさせ、場所によっては数フィートの深さまで澄んで見えるのだ。また、なめらかな岩の上は、日光浴を楽しむ人たちに独占されることなく、漁夫たちが備え付けた漁網や、干魚などもあり、こうした魚はクリスマスの食卓に上るのである。

さらにまた、島よりも砂丘を好む人たちもいる。彼らは南スウェーデンの広い海岸へと向かう。上流の保養地を利用する人もわずかいるが、白い砂の上か、暖かい水の中で気ままにのんびりする人が多い。特に海水浴に熱狂的な人というのは、こうした南海岸や、ゴットランド島、エーランド島の海岸に集まるのである。

上述の人々とは違い海へ行かない人は北部のラップランド地方の山々へと足を運ぶ。真夏の光の中で、野の草花の香り高い草原をハイキングしたり、涼しい山間部の湖へ行ったり、静かに広がる川で釣りを楽しんだりするのだが、こうした楽園の幸福感を、昆虫やトナカイと分かち合うのである。

しかし、最終的に大抵のスウェーデン人にとっての夏は、郊外にあるごく簡素な小屋一白木の床、最小限度の家具類、自分たちで割った薪の燃えるストーブ、そして近くの井戸から手桶でくみ上げた水一で過ごすのだ。

いかなる場合でも一森の中、海辺の近く、数百とも数千ともいわれる湖のうちのひとつの岸辺—こうした小屋は、人々の深く根強い要求（それは素朴さであったり孤独であったりするのだが）に応えるべくして利用されている。今日、国民の半数は都市に住んでいるが、これらは実に彼らの魅力的なものとなっている。

●ベルマンの日とヨットレース

7月の終わりに向かって、ストックホルムでは不滅の吟遊詩人、カール・ミカエル・ベルマンのお祝をする。2世紀前、ベルマンはストックホルムでの生活一路地、公園、特に彼が好んでいた居酒屋—などを歌った。彼は自分と同様な仲間や彼の作品をよく理解する友人に囲まれて、気楽な人生を送っていた。彼を語るとき、芸術を愛したグスタフ3世王と、ある居酒屋の女給、ウラ・ウィンプラッドを忘れることができないが、ウラの名前は今日まで語り継がれており、彼の歌も今だに全国民に歌われ愛されている。彼のよく通った場所のひとつに、大きなカシの木と、快ちよい草地的なあるデュールゴーデン公園がある。そこでは、例年野外劇が行なわれることになっており、夏のそよ風は彼の歌を公園中に運ぶのである。

こうして季節は独特のけだるさをもたない7月から8月へと移ってゆく。しかし、群島では一大行事がくり広げられる。8月の第一日曜日はボートレースが行なわれるのだ。これには、手こぎボート、モーターボート、そして花形ともいえるヨットに至るまで、あらゆる船が参加でき、入り組んだ湾から岬まで何回となく帆先を変えてのレースは、一種の巨大ピクニック（もちろん水上ということだが）といえよう。また西海岸はマルストランドでのヨットレースがあるが、やや専門的となり、英国やヨーロッパ大陸からも参加者がある世界的なレースといえる。

こうしているうちに8月も8日を迎えると、ザリガニ漁解禁となる。この日は暗いうちからカンテラの灯の下でザリガニ漁が行なわれ、スウェーデン人にとって大好物のひとつであるザリガニは、全国民が食べるというわけだ。そして季節は秋から再び冬へと向かい、また厳しい時期を過ごさねばならなくなるのである。

〈新刊紹介〉

T. フセーン教授『自叙伝』

Prof. Torsten Husén; An Incurable Academic—
Memoirs of a Professor—Oxford, Pergamon Press, 1983

当研究所と関係の深いスウェーデン科学アカデミー会員、ストックホルム大学名誉教授でIEA（国際教育到達度評価学会）名誉会長でもあるT. フセーン教授の『自叙伝』が、このほどイギリスの超一流の出版社であるパーガモン社から刊行された。

本書は一昨年スウェーデン語で認められた‘En obotlig akademiker—En professors memoarer—’（Natur och kultur）の英訳版であるが、現代の世界における教育研究の第一人者である著者が、いかにして政治と一線を画しつつも、政策立案・決定者を動かすところとなり、スウェーデンの、北欧の、さらに広く世界の教育を変えてきたかを知るに便利であり、国際的にも話題を呼ぶものとなろう。

なお、そのエッセンスともいうべきものは、‘Journal of Higher Education’ 1980 Vol. 51, No. 6 に載り、本月報でも一昨年10月号から昨年3月号にかけ連載した。

研究会報告

政治・外交研究会

Alva Myrdal の軍縮論

報告者 研究所顧問 小野寺 信氏

6月30日（木）午後2時から標記の研究会が、当研究所で開催された。

ノーベル平和賞受賞者であるが、我が国で余り知られていないA. ミュルダール女史の軍縮論を、①軍縮構想、②中立の権利義務の宣言、③防衛政策、④兵役義務制の要否、⑤結び、と順を追って克明に説明がなされた。

その一部については、月報の去る3、4月号でもふれておられたが、なお女史が、ミ民間防衛を国際的に拡大せよ、ミスウェーデンは現在も将来も軍備を必要とするミとしていること。さらにヨーロッパの核兵器反対（田舎軍縮）を広い舞台にのせるために、日本の果たす役割の重要性の指摘など、極めて収穫の多い研究会であった。

〈SIPニュース〉

スウェーデンの対外政策に関する声明書、 ヨーロッパとの協力及び軍縮を強調

大国間の対立が高まる時期には、スウェーデン及び近隣諸国の主要な目的は、ヨーロッパの同地域の平和と安定とを擁護することである。北ヨーロッパ諸国間の緊密

で信頼に満ちた協力が、これらの努力を促進してきた——以上は、3月16日の対外問題に関する国会討論において政府が提出した声明書からの抜粋である。

同声明書は、また最近、北ヨーロッパの戦略上の重要性が増大し、スウェーデン近辺の軍事活動が増えたが、北欧地域の防衛体制と安定性は、変わっていない。ただし、北ヨーロッパにおける列強の軍事行為を抑制するために、列強の責務を増大するについては、かれら自身の自覚を待たねばならぬ、と述べた。

同声明書によると、ヨーロッパは超大国間の緊張を緩和し、現在、世界を悩ませている重大局面を脱するための様々な努力において、中心的な役割を果たしており、スウェーデンの経済発展は、本質的に、ヨーロッパの情勢如何にかかっている。ヨーロッパ諸国間の広範な協力が経済衰微を脱し、失業を減じ

昭和44年12月23日
スウェーデン社会民主党
スウェーデン社会民主党
スウェーデン社会民主党

るために必要である、という。

また、同声明書は慣例的に、国際情勢の概観についても考察を行っており、そこでポーランド、トルコ、中東、アフガニスタン、南アフリカ、中米の状況に触れ、スウェーデンの積極的な対外活動は、ヨーロッパのみに留まるものでないことを強調している。さらに発展途上国に対するスウェーデンの政策は、開発という名に足る開発は、大衆に利益をもたらさねばならない、という視点に基づいており、また、スウェーデンの国々の主権及び人権を擁護する姿勢は、その民主主義の信念、国際法、それに安全保障政策の斟酌とに確固として基づくものであることも強調されている。

同声明書によると、重大な世界情勢は、スウェーデンが断固たる、一貫した対外政策をとり続けることを要求しているという。中立を願う国は、戦時のみならず、平時においても、あらゆる侵犯——それがどこから発しようとも——から、その領土の保全を計らねばならない。

軍縮努力は、スウェーデンの対外政策の中心的な要素であり、政府は、北欧非核武装地帯の実現を目指して努力を続けていく決意であるという。このような地帯は、その近辺で核兵器を所有する国々の保証を必要とする。現在、バルト海を非核武装地帯に、という強い要望がある。しかし国際法の要求のように、この海域が、北欧地域と同じ条件で、非核武装地帯に包含されうる可能性はないものと想定するに足る理由が存在する。

外国の潜水艦による領海侵犯に関する報告書、ソ連政府に強い不快感を表明

昨年10月末にスウェーデン政府が任命した潜水艦防衛委員会 (the Submarine Defense Commission) が、最近、調査報告書を提出した。それによると、昨年10月、ストックホルム南方の多島海、ホーシュフィエルデン湾でおきた外国潜水艦による領海侵犯行為は、おそらく6隻の潜水艦を含む、さらに大がかりな軍事作戦の一環であり、しかも、そのうちの3隻は、これまで知られていなかった機能——海底を動き回れる——を装備した極小型の有人艦であろうという。

委員会はこれ以前にも、昨年、この種の小型潜水艦が、スウェーデン領海内の軍事活動に参加していた確証をつかんでおり、ホーシュフィエルデン事件後でさえ領海侵犯が行なわれたのは明白としている。なお、昨年度中の外国潜水艦による領海侵犯は、40件を越えたといわれ、これは、前年度に比べかなりの増加である。

また、同委員会は、これらの潜水艦の国籍問題について、避けて通れない重要な問題として、次のような判断を下している。すなわち、委員会は、昨年度中の領海侵犯の大半が、東側陣営の潜水艦によるものであったという確証を握っており、この論点からいくと、つまるところ、それらの艦はソ連のものであったという結論を下さざるを得ない、としている。

委員会の報告書が、発行された同日に、スウェーデン政府は、ストックホルム滞在のソビエト大使を呼び「ソ連海軍の行為は、スウェーデンの領土保全に対する重大な侵犯である」とする強い調子の抗議文を手渡した。また、その中で、スウェーデン政府は、領海保全に関する防衛力の強化のために、一層、取締りを厳しくする方針を明らかにし、ソ連側に警告を発したと伝えられる。

なお、委員会報告に関して、ウーロフ・パルメ (Olof Palme) 首相は、次のように述べている。「外国潜水艦によるスウェーデンの領海侵犯は、国家間の関係に適用されるべきルールに相反するものであり、スウェーデンの領土保全を維持するために、あらゆる手段を構じてそれに対処することこそ我々スウェーデン人の断固たる意志であると同時に義務でもある。政府は、対外問題諮問委員会や他政党のリーダー達とも、潜水艦領海侵犯事件に関する話し合いを行ってきた。すなわち、先の強硬な抗議の内容は、今や私一人の意見ではなく、国民全体の意見を私が代弁しているに過ぎない。」